

『十八春』の成立に関する考察

河尻和也

0. はじめに

『十八春』は張愛玲（1920－1995）が、中華人民共和国成立後の中国で、上海の新聞『亦報』にペンネーム梁京を用い、1950年3月25日から翌年2月11日までの、およそ1年間にわたり連載した長篇小説である。後にアメリカに渡った張愛玲は、『十八春』後半部における共産主義を奨励した部分を書き換え、1968年『半生縁』として台湾の雑誌『皇冠』に連載した¹。

張愛玲は『十八春』を執筆するにあたり、アメリカの作家J.P. マーカンドの長篇小説『H.M. プラム』を参考にした事を、友人宋淇との会話の中で語っている。宋淇は両作品の共通点について「2組の夫婦の思いどおりにならない婚姻の他は、似ている点がほとんど見つからなかった」と述べている²。

しかし、近年台湾の研究者、高全之によって張愛玲が「2組の夫婦の思いどおりにならない婚姻」以外にも、プロットにおける多くの点で、マーカンドの『H.M. プラム』を参考に行っている事が明らかにされた。しかし、高論文では、張愛玲がなぜJ.P. マーカンドの『H.M. プラム』を参考にしたのか、その理由は具体的には明らかにされていない³。

本論文では、『十八春』と『H.M. プラム』の共通点をさらに具体的に比較考察する事により、張愛玲がなぜ『十八春』執筆の際、J.P. マーカンドの『H.M. プラム』を参考にしたのかについて考察する。なお、高全之論文において言及されている点については、各節において言及する。

1. 『十八春』執筆の背景について

ここでまず、張愛玲が『十八春』を執筆した時代的背景について簡単に述べる。『十八春』は先にも述べたように、人民共和国成立後の中国において執筆されている。『十八春』は、張愛玲がペンネーム梁京を用い執筆したことから、これまでの研究では張愛玲が本心とは異なる内容の作品、すなわち共産主義を奨

励した作品を執筆したために、ペンネームを用いたのだと考えられている⁴。張愛玲自身もアメリカにおいて、中国文学研究者、夏清志との手紙の中で、『十八春』を「金儲けのための作品」と述べている⁵。しかし、1950年当時、いくら張愛玲自身が『十八春』を「金儲けのための作品」として執筆したにせよ、金宏達が述べるよう、後に『十八春』の後半部を改稿し『半生縁』として発表する予定は、最初からは無かったものだと考えられる⁶。また改稿された『半生縁』の後半部は、『H. M. プラム』の後半部分に相似した点が多い。

本論文では、まず『十八春』と『H. M. プラム』の持つプロットの相似点を提示して比較考察し、『H. M. プラム』のいかなる部分を張愛玲が『十八春』の創作において利用したか、そしていかに張愛玲が自身のオリジナルプロットと合成して『十八春』を作り上げたかを考えていく⁷。

2. 両作品のあらすじ

『十八春』、『半生縁』共に物語の語りの形式として、全知の語りが用いられている。物語は1930年代の前半から1949年までの18年間(『半生縁』では1945年まで)、第二次世界大戦(日本の中国侵略～解放まで)をその背景としている。

大学時代の友人叔恵の下、上海で見習い技師として働く世鈞は、同僚の曼楨と恋に落ちながらも、封建的な実家と父の死、そして曼楨の姉、曼璐の策略によって彼女との結婚を断念する。友人叔恵も世鈞の幼馴染、翠芝に恋をするが、しかし革命への意志、家柄の違いから彼女を諦める。曼楨との別れによる傷心、そして翠芝の婚約解消から彼女と結婚する世鈞であるが、しかしうまくいかない結婚生活を送る。解放後、曼楨と再会し自分たちの過去を嘆く世鈞と曼楨は、新社会建設のため、皆とともに東北地方へ向う。『半生縁』においては、後半部の東北行きが削除され、主人公たちの恋愛が全面に押し出された結末となっている⁸。

『H. M. プラム』では、主人公ハリー・プラムが現在から過去を回想する「フラッシュ・バック」の形式が用いられている。物語は第一次世界大戦前から第二次世界大戦の始まる前までをその背景としている。

第一次世界大戦を経験したプラムは、家族への反発から大学時代の友人ビル・キングの下、ニューヨークの広告会社で働く⁹。同僚のマーヴィン・マイルと恋に落ちるプラムであるが、父親の死と、自分のキャリアを大切にするマーヴィンとの別れを経験する。失意のうちに、彼は婚約を解消した幼馴染ケイと結婚をする。彼女は友人ビル・キングの愛した女性でもあった。プラムはケ

イとうまく行かない結婚生活を送りながらも、大学時代の友人たちとのパーティでマーヴィンと再会する。

3. 前半部分の相似

「語り」の相違について

『十八春』、『半生縁』においては前節でも述べたように全知の語りの形式が用いられており、両作品における「語り」に違いは無い。ここで『十八春』第1章の叙述と、『H.M. プラム』第15章の叙述に注目してみたい¹⁰。以下に述べる語りの相違について、前出の高全之論文でも同様の見解が示されている。しかし、後の考察における小論の展開からここで簡単に言及する。

曼楨はかつて彼（世鈞—河尻注）に尋ねた事がある。彼がいつ頃から彼女の事を好きになり始めたのか、と。彼は当然こう答えた。「始めて君に出会った時だ」、と。彼がその言葉を言った時、彼自身とても上気していて、何でも信じる事ができるかのようであった。自分でもそれをでたらめであるとは、全く思っていないかった。しかし結局の所、彼が始めて彼女に出会ったのがいつなのかは、彼自身、全くはつきりと覚えていなかった。（p 1）

『H.M. プラム』において「語り」は、次のように用いられている。

かつてマーヴィン・マイルは私に、彼女を始めて好きになったのはいつなのかと、聞いたことがある。それは多くの仲の良い人々が、互いにたずねあった問いかけのように思われる。そしてその時、私は彼女に、私が彼女を好きになったのは、私が始めて彼女に出会ったときであると答えた。私がこう言うと、あなたは（読者—河尻注）それを信じる事となるだろう。しかし、実際の所は、私がマーヴィンの事を強く気になり始めたのは、彼女と出会ってしばらく後の事であった。（『H.M. プラム』15章：p 142）

ここで引用した『十八春』、『H.M. プラム』における「語り」を見ると、双方が内容としてはほぼ同様の事を物語っておりながらも、『十八春』においては全知の視点が、『H.M. プラム』においては主人公プラムの視点が用いられている事がわかる。『H.M. プラム』の「語り」について、マーカンドの研究者グロスは、

「例えば、ハリー・プラムの個人的な関係の中での、異常なまでの鈍感さが（彼自身の鈍感さ一河尻注）彼を傷つける事を、私達は目にする事となる。私達はほぼ、必然的に彼の立場で物事を考えるようになる…」と述べている¹¹。このように『H.M.プラム』における「語り」は、主にプラムの性格的特徴を、彼自身の「語り」を通して読者に提示するため用いられている。それに対し、『十八春』では沈世鈞の性格的特徴に、多くプラムと共有する部分を持ちながらも、張愛玲は曼楨の物語について深く言及するため、全知の語りを用いたと考えられる。

『十八春』、『半生縁』において曼璐は夫を自分の元から引き離さないため、夫に曼楨を強姦させる。そのプロットについて張愛玲が沈世鈞による「一人称の語り」を用いるとするなら、それぞれの登場人物の性格的特徴を細部まで描写しきれなかつたろうと言える¹²。

4. 中間部分の相似～オリジナルプロットとの合成（伝統との戦い）

まず本節の考察における、高論文との相違点について述べる。高論文では沈世鈞とプラムの両主人公が、同様に大都市で身を立てようとして、父の死によって、故郷の家庭を選択するというプロットの相似点が言及されている。しかし、高論文では張愛玲、マーカンドの作品の時代的背景を具体的に比較して考察していない。また、高論文では、「曼楨と曼璐の物語」に対する考察が、『紅樓夢』との比較において述べられている¹³。

沈世鈞の南京の実家には、母親と夫に先立たれた世鈞の兄嫁、その息子の小健、そして召使たちが住んでおり、彼の実家は皮物屋を営んでいる。しかし、彼の父親、沈嘯桐は実家と別の家に、第2夫人や他の召使らと共に暮らしている。世鈞は幼い頃から母親より父親の悪口を聞かされながら、母の境遇を思い、「将来、仕事がうまく出来るようになったら、母を（上海に一河尻注）連れて来たい」（p 39）と考えている。このように南京の家庭、そして彼を取り巻く環境は、張愛玲が他の小説においても多く描いた「旧社会の空気」を有している。彼が南京から上海に戻る際、張愛玲は南京で彼を取り巻く境遇を以下のように語り手に語らせている。

人の言う「時代の列車」とは、実際、道理にかなった比喻である。列車は勢いよく一つの時代を駆け抜けるかのようである。世鈞の家の、旧社会の空気、

悲劇の人々、埋まる事の無い怨恨は、全て背後に置き去りにされてしまった。列車はごうごうと暗闇に向かい駆けて行く。(p 83)

しかし『十八春』、『半生縁』において沈世鈞は、父の死に際し母親の身をかばい、上海で身を立てる事を諦め、実家の皮物屋を継ぐ事に決める。世鈞は、曼楨を家族に紹介しようと南京へ連れてくるが、しかし父親が曼楨の姉の職業を批判した際、曼璐をかばう事ができず、姉をかばう曼楨にも、「僕の父さんは考え方が古いにすぎない」(p 203)と述べる。沈世鈞はこのように都会で(上海)新たに身をたてようとしながらも、伝統を捨てきる事ができず、最後には故郷で(南京)で親が望むままに、幼馴染で金持ちの翠芝と結婚する。

一方、『H. M. プラム』における、主人公プラムは、古い考えを有する家族をニューオリンズに持つ。1920年代のアメリカは、産業の進歩により大量消費社会に入る。当時のアメリカでは旧来の清教徒的価値観に対する反発が生じ、女性に対する価値観も変化した。以前、女性が職業を持つ事は主に「生活の為」であった。しかし1920年代のアメリカにおいては反発を感じる人々はいるものの、比較的認められる事となる。マーヴィンもそのような女性の1人であり、ニューヨークにおいて身を立て、自立を目指す女性である¹⁴。マーカンドの研究者グロスはプラムの性格について、「最後の清教徒であり、エマソンの理想主義者」であると述べている¹⁵。プラムは第一次世界大戦の後、古い考えを有する家族への反発から、大学時代の親友ビルに促されニューヨークの広告会社で働く事となる。彼は自分の家族が古い考えを有し、マーヴィンのような新しい女性を理解するには時間がかかると彼女に述べる。しかし父親の死に際し、結局マーヴィンを理解しきれず、両親の望む幼馴染で身分が自分に近いケイと結婚する。

このように両作品を比べてみると、戦争を背景としている点、そして主人公の男性が変化を希望しながらも、結局は伝統的な家族の元へ後戻りしてしまうという点で、作品構造の一致を見る事ができる。

さらに重要な点は、『十八春』、『半生縁』と『H. M. プラム』におけるヒロインの運命の違いである。それぞれの作品におけるヒロインは、彼女らが自立しようとする女性であるという点で一致を見る事ができる。しかし『H. M. プラム』においてマーヴィンは、プラムと別れた後、プラムに似た男性と結婚する。

張愛玲は「曼楨と曼璐の物語」を、『H. M. プラム』のプロットを借用しながら

も『十八春』において創造している。彼女は対談で、「『十八春』で作者は曼楨と曼璐を違った形態の旧社会の犠牲者として描いている」¹⁶、と述べている。この事から張愛玲は『十八春』において、『H. M. プラム』の前半部における構造の一部を導入しながら、「曼楨と曼璐」の物語、彼女らの「伝統との戦い」にも重点を置き描こうとしていた事が理解されるであろう。また、『十八春』において「伝統との戦い」は革命により達成される事となるが、しかし『半生縁』においては『十八春』のように幸せな結末には至らない。

5. 登場人物の継承

ここで『十八春』、『半生縁』と『H. M. プラム』における登場人物の継承について簡単に考察する。以下の考察における世鈞、叔恵の性格描写の相似点について高論文では触れられていない。翠芝と一鵬の、プロットの相似点については、高論文においても述べられている。

『十八春』、『半生縁』の主人公世鈞は、これまでに見てきたように行動の上でも、『H. M. プラム』の主人公プラムの特徴を大きく受け継いでいると言える。

これまでの考察では両主人公の持つ伝統との確執という点での共通点を見てきた。さらに次のような細かな主人公の性格付けに関して、張愛玲は自身の作品に『H. M. プラム』の主人公プラムの性格を継承している事がわかる。

私はマーヴイン・マイルの秘密を全て知っている——彼女は彼女に属している物を欲しがっていた。なぜなら彼女に属していたものは、彼女に幸福の感覚を与えるからである。その感覚は、力を伴っている何かをもっていた。それが適切な言葉ではないにもかかわらず。かつて彼女に属した物に対し、彼女は彼女が持つ全てのものを与えた。私は知っているのである。なぜなら私は以前彼女のものだったのだから。(『H. M. プラム』17章：p 190)

…ただ世鈞が何年か後に思い出してみると、彼女のそのような部分もやはり、懐かしく思うのである。曼楨という女性はこういう性格だったと言える。いったん彼女の物となった物は、彼女はいつも見れば見るほど好きになり、それを世界で一番すばらしいものだと思うようになる…彼は知っているのである。なぜなら彼は以前彼女のものだったのだから。(p 9)

以上は両主人公が過去に愛した女性を回想する場面である。以上の場面は新聞版『十八春』、単行本版『十八春』、『半生縁』を通じて存在する。張愛玲は新聞版『十八春』から単行本版『十八春』に改稿する際に、世鈞の回想場面をいくらか削除しているが、その理由として、新聞版『十八春』創作時、彼女が『H. M. プラム』を参考にしながら書き継いでいたために生じたプロット間の矛盾が挙げられる¹⁷。

また上記した部分は、曼楨の性格の一部（「見れば見るほど好きになる…」）を表しているとも言える。レイ・チョウは、『女性と中国のモダニティ』において、上に引用した部分（曼楨の「見れば見るほど好きになる…」という性格）から、中国の女性の抑圧された心理的現実を読みとっている¹⁸。

張素貞は論文「張愛玲の《半生縁》」で世鈞の性格を、「…世鈞は生まれつき物怖じをする性格である。それは彼の温厚さや謙虚さのためであるとも言える。張愛玲は曼楨と翠芝の口を借りて、彼にこう抗議する。『どうして、自分で叔恵に及ばないと言うの？』。彼の温厚さは、彼の友人と、妻と叔恵の間の愛にまったく不注意にさせるのである…」と述べている¹⁹。以上の点は『H. M. プラム』においても同様に言える。ここで両作品の描写の共通点を挙げてみよう。

①恋人から見た主人公

「もしも僕がビル・キングの様に頭が良かったらなあ。」私は言った「多分僕はそんなにも心配をしないだろう。」「ねえ聞いてよ。」彼女（マーヴィン一河尻注）は言った。「ビル・キングがあなたより素晴らしいという訳では無いわ。私、あなたの彼に対する劣等感を捨ててもらいたいわ」「君はビル・キングが嫌いなのかい？」私は尋ねた。「私は彼のあなたに対する態度が気に入らないのよ。」…（『H. M. プラム』 p 158）

世鈞は言った。「僕という人間は、本当に話が上手くないんだ。僕が叔恵の様だったら良かったのに。」曼楨は言った。「叔恵は、人は悪くないけれど、たまに私は彼が憎い時があるわ。なぜなら彼はあなたに、自卑の念を与えるからよ。」世鈞は笑って言った。「僕は自分でもそういう所が、自分の欠点だと分かっている。僕は実際、欠点がとても多くて、良い所なんて少しも無いんだよ」（p 92）

②妻からみた主人公

「ハリー」彼女は言った。「あなたが彼の事をしゃべる時、いつも自分が彼よりも劣っているように言わないで。あなたは彼よりも何倍も素晴らしいわ——何十倍もよ。」（『H.M. プラム』24章：p 274）

「…彼は何をするにもとても上手くやることが出来る。僕は本当に彼を尊敬するよ。」翠芝は何も言わず、少ししてから、とても怒って言った。「なぜだか分からないけれど、あなたはいつも叔恵の事を言う時、まるで全ての事が彼に及ばない様に言うわ。けれど、実際あなたは彼よりも良い所が多いわ、彼に比べて一万倍もよ。」（p 260）

以上は新聞版『十八春』、単行本版『十八春』、『半生縁』に共通して存在する。このように、張愛玲は『十八春』を創作するにおいて、主人公の行動の基礎となる性格付けに関して、マーカンドの『H.M. プラム』を参考に行っている事が理解されるであろう²⁰。

曼楨とマーヴィンの共通点については、前節で述べた他は張愛玲がオリジナルプロットの中で曼楨を用いているため、後の章で詳しく考察する²¹。

次に主人公の友人、叔恵とビルである。彼らは共通して主人公の大学時代からの友人である。『H.M. プラム』のビルはマーカンドの研究者グロスが述べるように、「根無し草（rootless）」であり、強い上昇志向を有しており、プラムの友人で、大学時代の金持ちの友人達に嫌悪感を抱いている²²。そして新聞版『十八春』、単行本版『十八春』、『半生縁』における叔恵も同様、主人公と愛する女性（翠芝）よりも貧しい家庭環境にあり、主人公の妻と恋をするという点で共通点を見る事ができる。

しかし、新聞版『十八春』の叔恵には以下の点で、さらにビルとの共通点を見る事ができる。以下に単行本版『十八春』、『半生縁』では削除された叔恵の描写を見てみよう。

叔恵は言った、「あいつは（一鵬—河尻注）本当に能無しなのに。」世鈞は言う。「だけど、彼は学生時代、とても抜きん出っていて、いつも学園の花が彼を求めていたじゃないか？でも奇妙なのは、彼が分を護って従姉妹なんかと結婚した事だな。」叔恵は少し黙ってから言った、「別におかしくないさ。家

柄が釣り合っているし、相手は彼よりもさらに金持ちだ。妻の財産が加われれば、彼も都合が良いと思うがね…」(10.6)

このような叔恵の家柄に対するコンプレックスは、単行本版『十八春』、『半生縁』においては減少する事となる²³。新聞版『十八春』から単行本版『十八春』の変更は、叔恵の行動(革命への意思)と、彼の性格とに合理性を持たせるゆえの削除であると考えられる。

しかし、『半生縁』においては、新聞版『十八春』、単行本版『十八春』には存在せず、『H.M. プラム』と共通する友人の離婚のプロット追加を見る事ができる。変更の理由としては、『十八春』と『半生縁』の持つ小説テーマの変更が挙げられよう。以上の点に関しては後の章にて考察したい²⁴。

次に翠芝とケイの共通点である。彼女達は主人公の友人に恋をしてしまうという点、主人公の故郷に住む、幼馴染である点で類似を見る事ができる。また細かな点としては犬好きという両者の性格の一致を見る事ができる。

他には主人公の大学時代の友人であり、主人公の妻となる女性と婚約を解消し、妻の友人の女性と結婚する事となる、主人公と友人の金持ちの知り合い一鵬とジョー、そして彼らの結婚相手の文嬭とマデリンの共通を見る事ができる。また、新聞版『十八春』では、一鵬が『H.M. プラム』のブラウンの性格も有している事がわかる²⁵。彼らは主人公の友人であり、金持ちで古い価値観の中に生きる人間として描かれている点で同様である。

このように本節では、主に『十八春』、『半生縁』の持つ、『H.M. プラム』との共通点を確認してきた。次章では張愛玲のオリジナルプロットとの合成について考えてゆく。

6. 『伝奇』との接点、『十八春』の成立

『十八春』が、張愛玲の以前の小説集『伝奇』と共通する点は、金宏達も述べる中篇『金鎖記』における伝統との確執というテーマである²⁶。そしてそれは張愛玲が曼楨の物語として中間部に完全なオリジナルプロットとして導入した伝統との闘いに見られる。

『十八春』や『半生縁』における曼楨、曼璣、鴻才のような旧社会の人間と、閉鎖された空間は、『伝奇』においてはその事実(旧社会の中での女性の抑圧)が、アイロニカルに提示されるのみで、登場人物が封建的社会から脱け出す事

はない²⁷。しかし、『十八春』においては革命によって伝統との闘いは終結する事になる。また前半部において『H. M. プラム』と共通する、主人公世鈞の伝統との確執も、革命により達成されていると言えよう（しかし、張愛玲が述べるように作品はあくまで曼楨、曼璐の物語が主となっている）。

そのような創作の背景には、『十八春』が共産党政権の下、共産主義を賞賛する目的で書かれた作品であるという事実が挙げられる。張愛玲は1950年当時、共産主義に対して慎重な立場を取っていたし、当時執筆において微妙な立場にたたされていた。その事は、彼女が当時、胡蘭成との恋愛によって漢奸としての嫌疑をかけられていた事や、1950年に上海で開催された第一回文学芸術界代表大会で、周囲の人々が人民服を着ている中、ひとりチャイナドレスを着て出席し目立っていた事、梁京というペンネームを用いて作品を執筆していた事からも理解されよう。彼女は当時、彼女自身の個性と政治的環境の中で、慎重にならざるを得なかったのである。

このような環境のもとで、張愛玲は『H. M. プラム』の有する構造（戦争、時代の転換期を背景とする事、伝統との戦いなど）²⁸を利用し、『十八春』を革命小説として書き上げたと思われる。

『半生縁』では、『十八春』におけるような伝統に対する勝利は見られず、鎌田論文でも述べられるように、『伝奇』にみられる「凡人の生き様」が強調されているように思われる。鎌田論文の述べるように、張愛玲が共産主義政権の下で執筆した『十八春』における後悔を、『半生縁』において本来の姿に戻したという考察が導き出される。また同論文が述べるように、『十八春』があたかも2つの小説（『伝奇』的物語と革命物語）を合成させたかのように思えるという点についても、鎌田論文は、『H. M. プラム』と『十八春』の関係について言及してはいないものの、達見であると言える²⁹。

私は後半部の変更について、金宏達が述べるように張愛玲は当初『十八春』を書くにあたり、後の変更は考えていなかったと考える。

その理由として、これまでに述べてきた、『H. M. プラム』と『十八春』における作品の持つ共通点の他に、『半生縁』における改稿部において、『H. M. プラム』後半部分に一致する点が多く見られる事が挙げられる。金宏達は『半生縁』の改稿について、「当時の台湾で出版するには、改稿する他なかった」と述べている。次章では『半生縁』と『H. M. プラム』後半部を比較考察し、『十八春』、『半生縁』成立に関する見解を示すことにする。

7. 後半部の相違、『半生縁』の成立について

ここで『半生縁』と『H. M. プラム』の後半部を比較してみる。『十八春』で以下の部分は存在せず、登場人物達は皆、東北部へと新社会建設に向かう。

「ねえハリー、今あなた幸せ？」

私は答えなければならなかった。しかし誰がその問いに答えられるだろう？
「そうだね。」私は言った、「僕は幸せだよ、マーヴイン。」それは私が幸せに近づく事ができたという事である。(中略) 私は私達の間には存在する何か、もがき苦しんでいた。そして私はそれが何であるのかを知っていた。それは時間なのである。(中略)「ねえ、」彼女は言った。「私達、もう昔に戻る事は出来ないのよ。」(中略) もしも(家に一河尻注)戻りたくないのなら、戻る事はしなかつただろう。なぜならケイと私はとても長い間一緒にいたからである。そしてたぶん愛の真実とは何かというのならば——それは情熱や願いではなくて——月日なのだ——そして今、私は家へと帰っている。
(『H. M. プラム』37章：p 420, p 421)

「世鈞、あなた幸せ？」世鈞は思った、何を幸せと言うのだろうか？それはどのように解釈をするかによるのである。彼女(曼楨一河尻注)は問うべきではなかったのだ。普通の友人に言うように、“まあまあさ”と言う事もできない。(中略) 愛とは情熱でなく、そして懐かしさでもなく、歳月にすぎないのかもしれない。それは長い年月を経て生活の一部となるのである。(中略) 彼女はずっと知っていたのである。彼女が(先ほど)そう言ったように。彼らは昔に戻る事は出来ないのである。彼は今になってやっと、今日なぜ自分がそのように途方に暮れていたのかを理解した。彼は時間との間でもがき苦しんでいたのである。(『半生縁』p 355, 356)

以上の共通点を見ると、張愛玲が『半生縁』創作にあたり、『H. M. プラム』の後半部分を利用している事がわかる。だが、張愛玲はただ単に『H. M. プラム』後半部分を引用している訳ではない。なぜなら、『H. M. プラム』でプラムは、「戻りたくないのなら、戻る事はしなかつただろう」と述べ、プラムは過去の恋愛に区切りを付け、ケイとの結婚生活を選択する。その後プラムは、自ら否定し

ていたビルと妻との恋愛を理解して、人生というものの空虚さを感じるのである。一方『半生縁』では、世鈞は曼楨への思いをさらにつのらせたまま、物語は終結する。また、妻と友人の恋愛は、『H.M. プラム』でケイがビルとの仲を放棄し、プラムとの結婚を選ぶという点で（『半生縁』では、翠芝が世鈞の元に戻るかどうか、はっきりとは述べられてはいないが）『半生縁』と相似している。しかし、両作品は結末部が異なるものの、主人公が「時間との間でもがき苦しみ」、人生の苦しみを実感するという点で、相似していると言えるだろう³⁰。

8. おわりに

本論では、『H.M. プラム』、『十八春』、『半生縁』それぞれの作品を比較考察してきた。私の結論として、張愛玲は『十八春』を執筆した際に、『H.M. プラム』における物語の構造（伝統との闘い）を、「曼楨、曼璐」の物語と合成し、伝統の闘いを革命により勝利させ、革命小説として書き上げたと考える。しかし、その背後に当時の張愛玲の複雑な思いが存在していた事は明らかであろう。このように『十八春』は、1950年代の上海で、張愛玲の個性と政治的環境の間で、生み出された歴史的背景を有した作品であると言える。

一方、『半生縁』執筆の際、張愛玲は『H.M. プラム』後半部を参考に、『伝奇』における彼女の作風に近づけたと考える。私はここで、『半生縁』執筆当時の張愛玲が、金宏達述べるように、「当時の台湾で出版するには、改稿する他なかった」と考え、『半生縁』を書き上げたのか、「1951年以降の張愛玲が創作に対する力を失って行ったのか」について、断言する事はできない³¹。しかし、以後の張愛玲の作品が、執筆委託されたものや、翻訳、中国古典文学の研究が中心であった事から、さらに研究を進めてゆく中で、張愛玲の文学者としての真実の姿に近づいてゆきたい。

註

- 1 張愛玲は『半生縁』を最初、『惘然記』という題名で出版しようとした。しかし後に、宋淇に『惘然記』は小説の題名らしくないと指摘され『半生縁』に変更した。『惘然記』は後に張愛玲の作品集の題名となった。また『半生縁』は、1966年、香港の新聞『星島晚報』でも連載されていた。本論文で用いる資料は、『十八春』（新聞『亦報』1950

年3月25日から1951年2月11日連載)、『十八春』(亦報社<1951>初版)、『半生縁』(皇冠出版社<1991>)、J. P. Marquand『H. M. Pulham, Esq.』Academy Chicago Pub (1986)による。新聞版『十八春』について、入手した多くの資料の日付が欠如している。新聞版では1章が9日分、2章が13日分とわかれているため、論文中にて引用の際には、(1.1) <1章1日目>と表記する。新聞版『十八春』と単行本版『十八春』は、プロットの変更があるものの、基本的に物語は変更されていないため、本論では単行本版を用い、変更がある場合のみ示す。

- 2 林以亮「私語張愛玲」(陳子善『私語張愛玲』浙西文芸出版社<1995>所収)
- 3 高全之「本是同源性」(高全之『張愛玲學』一方出版社<2003>所収)
- 4 蘇偉貞『孤島張愛玲』三民出版社(2001)
- 5 夏清志「張愛玲給我的信件②」(『聯合文學』150期、聯合文學出版社<1997>所収)
- 6 金宏達「再看張愛玲《十八春》(及《半生縁》)」(子通『《十八春》点評本』中国華僑出版社<2003>所収)。また張愛玲は署名梁京で1951年に『亦報』に連載していた、同じく共産主義を奨励した中篇小説『小艾』について、後に作品集『餘韻』の中で、当時連載した作品は当初の予定していた内容と全く異なったものになっていたと述べている(『餘韻』皇冠出版社(1991))。金論文では、『H. M. プラム』との関係について触れられていない。以後本文中で用いる金論文とは、すべて本論文を指す。
- 7 張愛玲は『十八春』新聞連載終了後、前半部分に手落ちが有るとして、単行本化する際、内容の一部を変更している。拙稿「新聞版『十八春』と単行本版『十八春』についての考察」名古屋大学国際言語文化研究科多元文化専攻『多元文化』第4号(2004)を参照されたい。
- 8 世鈞は曼楨と再会し、お互いにこれまでの境遇を語り合う。アメリカ留学から帰ってきた叔恵も世鈞の妻、翠芝と再会する。
- 9 主人公プラムは友人ビルの下に身を置き、広告会社で働く事となる。ビルは家族(父親とおば)と離れて暮らしている。『十八春』、『半生縁』で、主人公世鈞は友人叔恵の下に身を置く。叔恵は家族と一緒に暮らしている。
また、高論文で述べられていない、プロットの相似点として、他に主人公と旧友の再会のプロットがあげられる(一鵬が翠芝との婚約を知らせに上海へやってきて、世鈞、曼楨と一緒に食事をする。『H. M. プラム』では、ジョーがケイとの婚約を知らせに、ニューヨークを訪れ、プラムとマーヴィンと食事をする)。
ここで、再会プロットに続く、新聞版『十八春』のみにみられ、『H. M. プラム』と共通している、回想描写をあげておく。『「…一鵬は自活している女性を見下していたの

だが、彼の曼楨に対する印象はとても深いものであった。十数年の歳月が過ぎたある時、彼は一度、世鈞に尋ねたのである…「あの願（曼楨—河尻注）という女性は、今どうしているのかなあ？」世鈞は言った。「僕も何年も彼女の事は聞いていないよ」一鵬は言った。「あの女性はとても素晴らしかったな。本当に、女性職員とは思えない。俺たちのような家柄の娘たちと何も変わる所がない！あの時、俺はお前と彼女がとても仲が良いのだと思っていたし、お前たちはきっと結婚するものだとも思っていた。あの時、俺は自分の事を賢いと思っていた。自分の目から逃れるような女性はいないと思っていた。今、思い出してみると本当にばかだった」世鈞はただ苦笑した。(6.5)』。以上は、『H. M. プラム』における以下の描写と共通している。『…かなり長い時間が過ぎてから、ジョーは彼女（マーヴィン—河尻注）と私の間に何が有ったのかを尋ねた。「今考えてみると本当に素晴らしい女性だったな」彼は言った。「最高だったね。おまえワシントン・スクエアでの事を覚えているか？なあ、俺はおまえが彼女と結婚すると思っていたんだぜ」「君が？」私は尋ねた。「俺はあの頃、本当にばかだった」ジョーは言った。「今考えてみると、彼女は僕らの知っている知的で愉快な多くの女性たちよりも、素晴らしかった。なあ、彼女は素晴らしかっただろう？」「ああ素晴らしかった」私は言った。(p198)』。

単行本版『十八春』、『半生縁』における、該当部分の削除の理由として、私は回想部分を減らし、張愛玲が読者の時間的混乱を避けたためであると考える。

- 10 『H. M. プラム』が『十八春』、『半生縁』と相似した構造を有しているのは主に 15 章以降である。また引用部は『半生縁』においても変更は見られない。本論で示す以外にも描写の相似点は存在する。例えば、結婚に至るプロットなど。
- 11 John, J. Gross 『JOHN. P. MARQUAND』TwaynePublishers (1963) p65. 高論文では、語りの違いについて、張愛玲の作品では、曼楨が物語の中心になっている事が述べられている。また高論文ではマーカンド、張愛玲が、それぞれの物語に対する重点の置き方の違いから、それぞれが「一人称」、「全知」の語りを用いていると述べている。前掲、高全之「本是同源性」(2003)
- 12 曼楨の物語が、「世鈞の語り」による間接的伝達の形で示されたとしたなら、曼楨の物語は具体性を欠いた描写となるだろう。また他人からの伝聞として曼楨の物語が具体的に提示されるとしたら、張愛玲はさらなる登場人物の創造を余儀なくされたであろう。
- 13 高全之論文では、世鈞、曼楨、翠芝の関係を、それぞれ『紅樓夢』における、宝玉、黛玉、宝釵と対比させ論じている。前掲、高全之「本是同源性」(2003)。また、高全

之は論文「大我与小我」において、曼楨と黛玉を対応させ、両登場人物の、年齢の「超時間性」を指摘している。しかし、新聞版、単行本版、『半生縁』を通してみるとするならば、曼楨の年齢は改作することに明瞭化されている事がわかる。詳しくは前掲、拙稿「新聞版『十八春』と単行本版『十八春』についての考察」（2004）参照。高全之「大我与小我」（高全之『張愛玲學』一方出版社<2003>所収）

14 E. H. アルバルト、田中寿美子他訳『アメリカ女性史』新潮選書（1976）参考。
前掲 Gross 『JOHN. P. MARQUAND』 p 67。グロスの述べる「最後の清教徒であり、エマソンの理想主義者」とは、変化する時代の中で変化しきれない主人公プラムの保守性を指している。

16 陳子善「張愛玲創作中篇小説《小艾》的背景」（陳子善『私語張愛玲』浙西文芸出版社<1995>所収）

17 詳しくは前掲、拙稿「新聞版『十八春』と単行本版『十八春』についての考察」（2004）参照。

18 レイ・チョウ、田村加代子訳『女性と中国のモダニティ』みすず書房（2003）p 216。

19 張素貞「張愛玲的《半生縁》」台湾国家図書館（ウェブ資料）。

20 また他には細かなプロットの相似点として、高全之論文も述べるように、ガスの香り（16章）、ラブレターの相似（17章）、蟹に当たってお腹を壊す（17章<『半生縁』のみ。『十八春』でもお腹を壊すが、蟹とは書かれていない>）が挙げられる。それぞれ『H. M. プラム』では（37章）、（32章）、（27章）において同様のプロットが見られる。子供の数も同じ。

高論文が述べていない点をあげる。『H. M. プラム』では、プラムはバーフィールド夫人に蟹をご馳走してもらう。『半生縁』では、世鈞が袁氏にご馳走してもらう。『H. M. プラム』でバーフィールド夫人の夫は石鱈会社を経営している。そして、『半生縁』では、袁家に食事に来ていた李夫人の夫が石鱈会社を経営している。しかし、『H. M. プラム』では、石鱈会社が、プラムがマーヴィンを思い出す契機として使われている点で異なる。

『十八春』では、世鈞は袁家に行くものの、李夫人は登場せず、袁夫人から豫謹に妻がいる事をきかされ、世鈞が曼楨を思い出す。また、主人公の友人（叔恵、ビル）が、家に来ることが分かり、どのようにもてなすかで、主人公（世鈞、プラム）が、妻（翠芝、ケイ）と喧嘩をするのも同じ。それぞれ、『十八春』、『半生縁』では16章、『H. M. プラム』では27章。

21 『H. M. プラム』との共通点としては、主人公の父親が病気になって故郷へ帰る際、

両ヒロインは（曼楨、マーヴィン）同様に、「私もついて行く」と言う（『十八春』、『半生縁』9章、『H.M. プラム』19章）。また、プロットの共通点として、父の死のため実家に戻る事になった主人公が、ヒロインを家族に紹介するために故郷へ連れて帰る点などが同じ（『十八春』、『半生縁』18章、『H.M. プラム』21章）。上記した点は、高論文では具体的に示されていない。

22 前掲 Gross 『JOHN. P. MARQUAND』 (1963) p65

23 単行本版、『半生縁』においても、叔恵のお金に対する微妙な感覚は存在していると言える。例えば、翠芝を思う叔恵の内面描写、「彼（叔恵—河尻注）は少し寂しかった。彼女（翠芝—河尻注）と世鈞は元より縁が無い、それでは彼は？彼と翠芝は環境があまりにも異なる為、やはり縁が無いのである。」（単行本版p62、『半生縁』p60）など。以上は新聞版にも存在する（4.9）

24 水晶は張愛玲との対話において以下のように述べている。「また『半生縁』に話が及んだ。私は彼女に、世鈞と曼楨の恋愛について、叔恵が全く真相を知らないかのであるが、これは実情と符合しないと述べた。なぜなら、私の知る所によると、男性は愛情の方面では、とてもおしゃべりで、友人の恋愛については、ほぼすべてを了解している。その上、男性は好奇心が強く、小説中の叔恵がそうであるように、曼楨に少しも関心を持たないということは実情に一致しない」。張愛玲はこれを、「当時の30年代の男性は皆、西洋の学問を学んでおり、恋愛の仕方も一様に真似をしており、叔恵の振る舞いがさっぱりしているのもそのためなのだ」と否定している。だが、この点について『H.M. プラム』の、ビルの影響を述べることはできないだろうか。水晶「蟬一夜訪張愛玲」（陳子善『私語張愛玲』浙西文芸出版社<1995>所収）

また、同対話で張愛玲は、使用人の阿宝についても以下のように述べている。「私が（水晶—河尻注）阿宝の描かれ方が不自然であると話をすると、彼女（張愛玲—河尻注）はすぐにそれを認めた。なぜなら、曼楨が病気を装って、曼楨を彼女の家へ招き入れた時、阿宝の演技は“不自然”すぎるのである。彼女はまるで役者のようであり、使用人ではないのだ。どれだけ彼女がその事を事前に知っていたにせよ、曼楨も映画監督のように彼女を訓練する事は不可能である。この点に関して、彼女は物語を展開する為に、阿宝を“利用”したと認めた。」

25 詳しくは前掲、拙稿「新聞版『十八春』と単行本版『十八春』についての考察」（2004）参照。

26 金宏達は前掲論文「再看張愛玲《十八春》（及《半生縁》）」（2003）において、『伝奇』と『十八春』の接点として、『金鎖記』における七巧と、『十八春』の曼瑛との、形象

の相似を挙げている。七巧は封建的な家の中で発狂して、自分の娘を自分と同じ境遇に向かわせる。

27 ここで述べる、『伝奇』における封建社会へのアイロニカルな批判とは、主として『金鎖記』を指す。『伝奇』における、他の小説に対する考察については、稿を改めて言及したい。

28 新聞版4章では、さらに『H.M. プラム』と相似した次のような戦争描写が存在する。それは、ダンスパーティに出席した世鈞と翠芝が、日本軍の東北侵攻について話をするシーンである(4.17)。この場面は、『H.M. プラム』では、プラムとケイが、フランスがドイツに宣戦布告をするかどうかと議論をしている(p106)。この場面が続くハンカチのプロットも、張愛玲は、『H.M. プラム』と同様のプロットを用いている。『十八春』4章におけるダンスパーティのプロットは単行本版『十八春』、『半生縁』には存在しない。該当部分の削除の理由については、前掲、拙稿「新聞版『十八春』と単行本版『十八春』についての考察」(2004)を参照されたい。

また、司馬新、富田まさ代など、曼楨の監禁のプロットを、張愛玲自身の過去の体験に関連させて論じた論文が見られる。この点について、私も張愛玲が『十八春』を執筆する際、いくらか張愛玲自身の体験を参考にしたのではないかと考える。司馬新『張愛玲与頼雅』大地出版社(1996)、富田まさ代『『半生縁』と張愛玲』野草62号(1998)

29 鎌田純子「50年代初期の張愛玲—『十八春』を中心に—」野草72号(2003)

30 前掲、高全之「本は同源性」(2003)においても、「戻れない時間」という描写の相似点について言及されている。

31 双方とも前掲、金宏達「再看張愛玲《十八春》(及《半生縁》)」(2003)による。